

## 理学系研究科長（理学部長）と理学部職員組合との交渉

1992年11月16日，12月21日，1993年1月25日，2月22日，3月22日に久城学部長・大六事務長と理学部職員組合（理職）との，同4月26日，5月17日，6月21日，7月27日，9月27日，10月18日，11月15日，12月16日，1994年1月21日，2月28日に，小林研究科長・三浦事務長と理職との定例の研究科長（学部長）交渉がおこなわれた。主な内容は以下の通りである。

### 1. 職員の昇級・昇格について

理職は，この間の研究科長（学部長）交渉において，教室系事務職員の4級から5級への昇格に関して，事務主任の5級昇格が主任発令後4年（50才以上で3年）以上も据え置かれることに対し改善を要求した（92年11月，93年1，2，4，10月の交渉）。そして，該当する事務主任のすみやかな5級昇格実現を要求した。また，具体的な提案として，大学院重点化にともなって，各専攻ごとに事務主任を置くなどの工夫をして掛長ポストを増やす努力をしてほしい旨要望した（93年6，10，12月の交渉）。5級昇格の改善について，事務長は，理学部（理学系研究科）としてポスト要求していると回答し，5級昇格が改善されるよう努力すると述べた（93年1，2，4月）。また，各専攻に事務主任を置くことができるの考えを示し，平成6年度の概算要求で出すことになるだろうと述べた（93年12月）。

50才を過ぎて4級昇格基準に1ヵ月不足で昇格ができなかった物理事務室主任の4級昇格に関して，理職は最優先で実現するよう努力を求めた（93年7月）。事務長は努力すると述べた（93年7月）が，いまのところ動きがないと回答した（94年2月）。

理職は，天文センターの技術官でありながら事務職員として処遇されていた人の4級昇格実現を要求した（92年12月，93年1，2月）。事務長，研究科長は，手続きのミスであり，早急に実現の努力をすると回答した。その後93年1月1日付で4級昇格が実現した。

理職は行（二）用務員の3級昇格に関して，業務委託職員を部下に含め，付加業務をきちんと評価して昇格の上申をおこなうよう要求した（92年11，12月，93年1，2，3月）。事務長は，前向きに検討し努力すると回答した。その後，93年7月の東職と局長との交渉の場で，東大本部が付加業務を認めていないらしいことが明らかになったことを受け，理職は，同9月の交渉において，行（二）不補充・定削のもとで，部下が増えない以上，付加業務を職務内容に加算するのは当然だと主張した。理職は，94年2月の交渉で改めてこの問題を取り上げ，部下数の運用緩和と付加業務を評価する動きがあることを示した上で，行（二）用務員の3級昇格への努力を要請した。事務長は，付加業務を含めた上申を検討すると回答した。

93年12月の交渉で，理職は，今年度の技術職員の6級昇格が年齢順でなかった理由をたずねた。事務長は文部省の決定であったと回答した。94年1月の交渉で，理職は技術職員，図書職員の4・5・6級昇格の要望書を提出した。同2月の交渉で，事務長は要望書をふまえて昇格を上申すると述べた。

### 2. 中途採用者の不利益回復について

理職は，民間からの異動のため処遇面で著しい不利益を被っている技術職員の不利益回復につい

て、93年5月11日、東職を通して人事院に不利益回復の「行政措置要求」をおこなった。93年6月、人事院は行政措置要求を受理した。理職は、このような事態の進展をふまえ、理学系研究科（理学部）当局としても不利益回復へ向けて努力してほしいと要請した。また、特昇を別枠で確保してほしいと要望した。研究科長、事務長は、事情を理解し努力したいと回答した。しかし、事務長は、特昇については別枠での確保は難しいと述べた。94年2月の交渉で、事務長は、本部から不利益回復の件で問い合わせがきていると述べた。

### 3. 行（二）から行（一）への振り替えについて

理職は、行（一）の業務をおこなっているながら行（二）処遇に据え置かれている職員について、行（一）への早急な振り替えを、毎月の交渉において要求した。理職は、94年2月、この件に関して人事院へ「苦情処理」の申し入れをおこなった。同2月の交渉において、理職は、理学系研究科（理学部）としても行（一）振り替え実現のため積極的に推薦するよう要望した。研究科長はしるべく推薦をおこなっていると回答した。

### 4. 職員の研究科への所属問題について

理学部の理学系研究科への移行に伴い、教官は研究科所属になったが職員が理学部所属のまま据え置かれた問題に関して、理職は要望書を提出し（93年3月）職員のみやかな研究科移行を要求した（93年2、3、4、6、7、11、12月の交渉）。94年2月の交渉において、理職はあらためて職員の研究科移行の概算要求の結果についてたずねた。事務長は、今年度は実現しなかったと回答した。理職は、引き続き研究科移行への努力を要請した。研究科長は、努力すると回答した。

### 5. 柏問題

理職は、職員の確保を曖昧なままにして計画が進むと、結果として現在の職員をまわさざるを得なくなることを憂慮し、事務官・技術職員の確保

の重要性を主張した（93年7、9、10、11月の交渉）。研究科長もこれに賛意を示した。93年9月の交渉において、理職は、生物系の大規模な柏移転プランは理学部の空洞化を招くものであり、また事務官や技官の確保の見通しがいいことから、この計画に反対であることを述べた。同11月の交渉において、理職は、柏問題に関連して、全職員に対する説明をおこなうこと、労働条件の変更等に関しては組合と交渉し合意を得ること、事務部の新設と職員増員要求をおこなうこと、柏に配置される職員が調整手当、住宅、通勤等で不利益を被らないようにすること、の4点を骨子とする要望書を研究科長に提出した。また、調整手当の確保のため職員を3年で入れ替える案については、理学系各専攻の独自性や技官の職務の多様性から無理であることを指摘した。

### 6. 生物化学教室の職員補充問題

93年4月以降の毎月の交渉において、理職は、4月1日付で他教室に昇任異動した生物化学教室事務職員の後任を補充するよう要求した。また、同教室を6月30日付で退職した教務職員より助手になった職員1名の後任を補充するよう、要求した。科長は、先の職員の補充に関しては、前執行部が約束したことではあるが、現在過員であり補充できないと回答した。後の職員の件について、一旦は、人事委員会の決定として、助手ポストであるため人事委員会では取り扱えないと答えた。93年10月、科長は、助手ポストは属人的扱いであり、人事委員会の方針は誤りであったと述べた。また、その時点では理学系に教務職員のポストが1つあり、生物化学教室に優先権があると述べた。事務長は、理学系は現在過員であり、そのポストも定員削減の対象となることも考えられると述べた。同11月、理職は、引き継ぎが充分におこなわれなかったため理学系執行部の方針が二転三転したことを問題とし、科長も引き継ぎのまずさがあったことは認めた。その後、理職には何の説明もないまま中央事務に職員を補充することを6

月の教授会で決め、11月1日付けで採用していたことが明らかになった。理職は12月の交渉で、教授会に諮っても理職に知らせなかったのは片手落ちであると抗議した。科長はその点に関して謝罪した。理職は引き続き職員の補充要求をおこなった。科長は、理学系全体の職員定数の見直しも含め人事委員会にまかせていると回答した。しかし、生物化学の特別な事情については理解していると述べた。

### 7. 技術系職員の専行職移行問題

94年2月の交渉において、東大当局案が公表された2月14日以降、理学系の技官への当局案の配布が遅く、十分に議論する時間がなかったことについて、理職は遺憾の意を表明した。科長は、技術委員会を経て公表したが、スケジュール的には最短であったと述べた。しかし、結果として配布が遅くなったことは遺憾であると述べた。理職は、当局案に対する理職の見解を科長に手渡し、理職の意見が反映されるよう求めた。科長は、理職の見解を伝えると述べた。

### 8. 定員削減問題

理職は、交渉の席で機会あるごとに定員削減問題を取り上げ、事務職員、技術職員の削減は限界にきており、教育研究面でも教官に負担がきてい

ることを訴えた。また技官の仕事などはパートでは補えないことを指摘した(93年10月)。科長は同感であると述べた。93年11月の交渉において、理職は資料を示しながら、定員削減がもたら教室職員にかかってきており、用務員、技能職員の減った分がすべて教室事務の負担増になっていることを指摘した。科長は事情はよく理解していると述べた。同12月の交渉において、人事委員会において教室職員の定数配分の見直しをおこなっていることと関連して、お金で職員定数の不足を解決しようとの案が出されていることについて、各研究室からお金を吸い上げるようなやり方は職員の「人身売買」につながるもので、理職は認められないと主張した。科長は、かつての事例はよく知っており、そのようなことが起こらないようにすると述べた。

### 9. 1号館建て替え問題

理職は、1号館建て替えに関連して、工事期間中の理職の部屋の確保、並びに新1号館における理職の部屋および居住環境の確保を要求した(93年6月)。科長はそれを認めた。理職は新1号館内への福利厚生施設の設置を要求した(同7月)。科長は要求を建物委員長に伝えると約束した。

# 人事異動報告

## (講師以上)

所属	官職	氏名	発令年月日	異動内容	備考
生物化学	教授	井上 康男	6. 2. 16	昇任	助教授より
"	助教授	田之倉 優	6. 3. 1	"	生物生産工学 研究センターへ
物理	教授	神戸 勉	6. 3. 16	"	助教授より
"	"	小林 孝嘉	"	"	"
"	助教授	川本 辰男	"	"	助手より

## (職員)

事務部	人事掛 主任	植木 祐輔	6. 3. 1	配置換	農学部人事掛 主任へ
"	事務官	和田 敏雄	6. 3. 1	"	工学部総務課 人事掛より

## 訂正お詫びについて

理学部広報の前号，平成6年2月発行（25巻1号）に誤りがありましたので，下記のとおり訂正し，お詫び申し上げます。

ページ	誤	正
2ページ	図中	昭秋
15ページ	所属	[天文学専攻]
27ページ	24行目	5. 1. 16
同	26行目	所属「〃」
30ページ	18行目	柴藤 貴文
最終ページ	松本 良(地質)	4 5 5 2
		昭和
		[天文学専攻]
		6. 1. 16
		国際交流室
		紫藤 貴文
		4 5 2 2

## 博士（理学）学位授与者

平成6年1月24日（月）付学位授与者（3名）

所属	専攻	氏名	論文題目
論文博士	物理学	藤田 雄三	核研空芯 $\beta$ 線分析器のための焦点面検出器の開発と鉛領域三核種からの内部転換電子の高分解能測定
課程博士	物理学	江尻 晶	REPUTE-1 逆転磁場ピンチプラズマにおけるイオン加熱機構の研究
課程博士	植物学	ラシード・アブドゥル	Cardamine（タネツケバナ属，アブラナ科）の属間および属内分類群の再検討

平成6年2月21日（月）付学位授与者（14名）

所属	専攻	氏名	論文題目
論文博士	地質学	山本 啓司	プレート収束域の下部地殻における変形変成作用：日本の本州弧およびパキスタンのコーヒスタン弧の例
論文博士	情報科学	佐藤 敏明	多くの自由局面を含む立体のモデリング
論文博士	物理学	安藤 陽一	超伝導細線中の磁束グラス転移
論文博士	物理学	アントワーン・ブーケ	クラスター型配置間相互作用模型による3d遷移金属化合物の電子構造における系統的变化の研究
論文博士	物理学	谷井 一者	可飽和吸収媒質をもった2モードCO <sub>2</sub> レーザーの不安定性とカオス
論文博士	物理学	有馬 孝尚	遷移金属酸化物の電子構造の光学的研究
論文博士	地球惑星物理学	柴田 清孝	効率的な高精度放射スキームの開発とその気候モデルの適用について
論文博士	地球惑星物理学	植田 義夫	磁気・重力異常による日本列島とその周辺島弧の地殻構造の研究
論文博士	地球惑星物理学	磯部 篤彦	対馬暖流の季節変動
論文博士	化学	安中 雅彦	高分子ゲルの多重相
論文博士	化学	大西 久男	SnO <sub>2</sub> 表面上におけるH <sub>2</sub> -O <sub>2</sub> 反応に対する外部磁場効果の研究
論文博士	化学	遠嶋 康徳	大気中のメタンの空間的分布に関する地球化学的研究
論文博士	地理学	永田 淳嗣	沖縄離島におけるサトウキビ農業の政治生態学的研究
論文博士	地理学	江口 卓	全球、インドシナ半島およびブータンヒマラヤにおける降水の地域性